



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「インド・大菩提寺物語」④

読者諸氏よ。前述(10月号)の大菩提寺境内の七つの聖処巡りにおけるクイズ問題は解けたでしょうか。まず、クイズ問題1 金剛宝座に座った不埒な日本人について解答してみよう。

ブッダが悟られた聖菩提樹の下に金剛宝座がある。縦143、横238-高さ13.5センチの石である。石座上部には幾何学的な模様が、石座の四方側面にはパルメット(から草模様)とガ鳥(Hansa、白鳥)の模様が描かれている。ガ鳥は離欲(detachment)の象徴である。

この宝座はヴァジャラ・アーサナともいうが、ヴァジャラ・シラーともいう。ヨーガ体操では、坐法(ポーズ、体位)のことをアーサナというが、ここでは座布団を意味している。シラーは「石」のことである。その辺に転がっているのは、只の石ころに過ぎないが、聖者が座った石座は聖なるものになる。

この金剛宝座は、アショカ王によって寄進されたと云われている。この宝座石(黄灰色砂岩)は、チュナール地方(バナレスの西22キロ)で研磨されたといわれている。アショカ王柱もこの地で製作研磨された。サンチーにある王柱には、同じくパルメットとガ鳥の模様がみられる。

金剛宝座は大菩提塔の内部あったかも、という説もある。塔中央には巨大なブッダ像が鎮座しているが、その前に円形の穴があるが、そこが宝座のあった基礎穴であるとされている。(シヴァ・リングのあった場所との説もある)

それどころか、聖菩提樹も塔内にあったかもしれないという説がある。(サンチーの仏塔の欄潤に描かれている)この説は若干難があるように、わが輩には思える。

わが輩は、ヒマラヤ山中で幾つかの聖石座をみたことがある。ヒマラヤ山中では名も知れぬ行者が石座の上で瞑想苦行した。それを見た村人は、そこを「聖なる処」として、聖石座を大切に守ってきた。

数多ある石座の中で最も聖なる石座は、ブッダがお座りになった金剛宝座である。それなのに、この上に座った不埒者がいる。しかもそれが日本人であるいうから恥ずかしい。それは誰かと言うなら、死刑囚麻原彰晃こと松本智津夫である。1992年11月のことであった。

あの日の悪夢を、わがミトラ城の知人V・ジェインがわが輩に語った。

ジェインは、麻原たち120名の大集団をブッダ・ガヤーに案内することになった。そのキッカケは京都のR社からの依頼であった。R社には麻原の弟子(死刑囚)の父が勤務していた。ジェインはそこと取引があった。ビッグ・ビジネスにジェインは喜んだが、この集団についてよく知らなかった。

実はこのR社(大阪)とわがミトラ城は取引があった、というよりお世話になっていた。一昔前にイン

ド査証を申請するのに航空券の提示が必要であった。ところが何らかの事情で発券が間に合わないときは、仮の航空券（有価証券）を作らなければならなかった。仮といっても、悪用すれば使うこともできた。紛失すれば弁償しなければならなかった。他社に依頼すると 20 数万円ほどを預けて、返還のときに返してくれた。査証代行料数千円にしては面倒でリスクのある仕事であった。R 社はわが輩を信用してくれて、わずかの手数料でやってくれた。

ジェインは、麻原集団を案内してベナレスからブッダ・ガヤーに向かうことになった。東に向かって約 260 キロである。ブッダは逆ルートで初転法輪の聖地サールナートまで徒歩で八日間ほどかかったと云われているが、最近では道路事情がよくなり 5~6 時間でいける。しかし、麻原集団のころは、道路事情が悪く午前 6 時に出発して午後 5 時ころに着いたこともあった。

それなのに麻原はジェインに命令した。

「ブッダ・ガヤーまでノンストップで行け！」

たとえ 5~6 時間でも、女性もいる大集団ならトイレに行く人もいるし、途中気分が悪くなる人もいる。6 時間以上なら軽食や休憩をとらないと、ドライバーの過重労働で事故のもとになる。ドライバーがストライキをおこせば、途中で立ち往生になり、困るのはジェインである。そのことをジェインは麻原に伝えたが、たとえトイレでも止まるなどという厳命であった。途中停車すると穢れるとでも思ったのかもしれない。トイレ休憩がなければ、漏らすものもいて、車内はおしっこで穢れる。

ところが、不運にもガソリンがきれた。麻原は激怒したが、念力でも専用バスは動かない。そもそもそのことを予知する能力がなかった。念力も予知能力もないことが露見したのである。それでもおしっこ族は、“不運”に救われた。

（この段階で、ジェインはウンザリしたらしい）

わが輩が奇妙に思えるのは、麻原の直観的強権的ワガママを弟子や信徒たちが容認していたことである。（宗教というものは実に奇妙なものだ）

ブッダ・ガヤーでは、金剛宝座に座り警備員に引きずり下ろされたが、総勢 120 名のためそれ以上手が出せなかった。次に警官がやってきたが多勢に無勢で為す術がなかった。それでガヤーの駐屯地から軍隊の出動を要請することになった。

慌てたジェインは、「センセイ、おりて下さい」と懇願したが、麻原は傲慢にも「わたしはブッダだ！」と言い放った。軍隊がやってきたので、ジェインは逮捕されることを恐れ、さっさとその場から離れ隠れていた。

その後に、麻原は急にダージリンに行けと命令してきた。ダージリンはヒマラヤに連なる避暑地（標高 2134m）で、紅茶の産地として名高い。ブッダ・ガヤーから 418 キロもある。もともと大集団の移動を突然変更することは困難である。

「ジェインさん、それからどうしたの？」

わが輩は訊ねたが、彼は顔をしかめて「知らない」と素っ気なく答え肩をすくめた。彼は呆れ果てブッダ・ガヤーで麻原集団から手を引いた。

わが輩は冗談で「麻原には尿瓶が似合う」とジェインに言ったが、彼は笑わなかった。